

機関番号：13902
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19720123
 研究課題名（和文） 植民地朝鮮におけるラジオ「国語（日本語）講座」の展開とその効果に関する研究
 研究課題名（英文） A research of development and the effect of radio "National language (Japanese) course" in colony Korea
 研究代表者
 上田 崇仁 (UEDA TAKAHITO)
 愛知教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：90326421

研究成果の概要（和文）：

ラジオプログラムの放送時期の確定作業を行い、テキストの発掘、聴取者の発見に努めたが、テキストは1冊しか発見できず、聴取者は見つからなかった。しかしながら、新聞と連携していた時期があったことが明らかになり、新聞にも独自の「国語」講座が掲載されていることから、メディアを利用した教育が展開していたことがわかった。併合直後の1910年9月に、すでにハングルで表記された日本語の読み物が掲載されており、その活用方法について検討する必要があることがわかった。

研究成果の概要（英文）：

I confirmed the broadcasting time of the radio program.
 I tried for the excavation of the textbook and the listener's discovery.
 However, I was able to discover only one textbook.
 I was not able to find the person who was listening to the radio.
 However, it was clarified that there was time when the radio was coordinated with the newspaper.
 It has been understood that the education using media developed from publishing an original "National language" course also in the newspaper. The Japanese sentence had already been written by Hangul was published in the newspaper in September, 1910 when Japan annexed Korea empire.
 I showed the necessity for examining the use.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	0	1,600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	480,000	3,680,000

研究分野：日本語教育学

科研費の分科・細目：日本語教育史

キーワード：植民地、朝鮮、ラジオ講座、日本語教育、国語教育

1. 研究開始当初の背景

私の博士論文のテーマは、植民地朝鮮における「国語」教育に関して、教科書の改訂に注目したものであった。これまで、併合前を含めて6種類の教科書が存在しているとされていたが、併合前に3種類、また、併合後も毎年部分的な改訂が行われていることを明らかにし、その改訂箇所の特定制業も行った。この一連の作業の中で、植民地における日本語教育が、それまで言われていたような「皇民化」という単純な視点では論じられないことが明らかとなった。このことから、植民地朝鮮で行われていた「国語」教育について、再度検討しなおす必要があることが明確となり、ラジオというメディアに注目し、マスメディアの中で日本語がどのように教育されていたのかを明らかにしたいと考えた。

学校教育で行われた「国語」教育は、教科書が残っていることから、比較的、当時の状況の再現が可能ではあるが、ラジオは録音機器の普及の問題や、ラジオ自体の価格の問題があり、再現することは非常に困難であると考えられた。

しかしながら、レコードという音声教材の利用から一歩進んだ教材としてのラジオがどのような位置づけにあったのかを明らかにする必要があったと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、植民地であった朝鮮半島における「国語」教育について、これまでその記録の少なさから言及されてこなかったラジオ講座を対象とし、多面的な日本語教育の様子を記述していこうとするものである。この研究を通じて、植民地朝鮮で展開した日本語教育が、語学教育の教授法の発達や、日本語史的な視点からの分析が可能であることを示したいと考えた。

ラジオ講座についての研究は、ほとんど見られない状況であり、植民地研究でもラジオ利用はプロパガンダ的な視点がほとんどであり、教育を扱ったものはなかった。日本語教育の視点からも、マスメディア利用という視点はかけており、当時の最新機器という意味で、語学教育がどのように利用されたのかを明らかにする必要があったと考えた。

3. 研究の方法

毎日新報のラジオプログラム欄の調査を日常的に行い、どのプログラムが、どの時期に放送されていたのかの確定作業を進めた。

調査は、影印本の『毎日新報』のプログラム欄を取り出し確認しつつ、マイクロフィルムに焼かれている朝日新聞社の挑戦版ページの確認を通じて行った。

また、当時のラジオ聴取者を対象に放送内容がどのようなものであったのかの確認作業、番組製作者側の意図を図るため、製作者へのインタビューやテキストの分析を行うようと考えていた。

テキストの探索は、韓国及び日本の図書館を中心に行い、韓国の古書店についてもソウル、プサンを中心に問い合わせを繰り返した。

4. 研究成果

毎日新報のラジオプログラム欄の調査はほぼ終わることができた。そのため、4種類のプログラムがどのような時期に放送されていたのかは、明らかにできたと考えている。その4種類のプログラムとは、「初等国語講座」「中等国語講座」「国語会話の時間」「促成国語講座」である。一方で、当時の資料の印字が不鮮明で、当初、放送全体のなかの「国語講座」の位置づけを把握するつもりで進めていた調査が、結果として、国語講座の放送状況のみを調査することになっていった。また、同じく印字の不鮮明さが原因で、確定できていない時期も多少残っている。そのような状況の下、データベース化しようとしていた事業を断念し、単に、紙ものベースでの調査結果の把握にとどまっている。さらに費用と時間をかけなければ、データ化は終了できないと考えている。

次に、聴取者へのインタビューであるが、当時のラジオ聴取者を見つけることが困難で、科研費での調査期間であった4か年中、一度も行うことができなかった。調査方法を再度検討する必要があると思われる。

一方、ラジオ放送制作者側の方へのインタビューは、成功している。しかし、インタビューは本科研以前の科研費での成果であり、この方のご紹介を受けて進める予定だったインタビューは、ご高齢ということもあり、連絡が取れなくなった時点で行き詰まってしまった。あわせて、戦後のKBSで働いていらっしゃる方にも、ご協力を依頼していたのだが、この方についても連絡が取れない状況が続いている。朝放協という、朝鮮放送協会でも働いていた方々の団体にも問い合わせを行ったが、お返事が頂けていない状況である。このように、戦後時間が経ってしまったことから、直接、インタビューによって、本

科研の調査対象であるラジオ講座の実態を明らかにすることは困難な状況にあるといっていてよいだろう。

そこで、テキストの発見、講座に関する記事等に基づく研究を中心に行ってきた。

テキストについては、韓国国内の図書館、日本国内の図書館、アメリカの議会図書館を対象に、目録による調査を行った。その結果、長野県駒ケ根市にある駒ケ根市立図書館に1冊保管されていることが明らかとなり、このテキストに関する調査を進めた。テキストそのものの発見は、本科研につながる以前の科研調査中のものである。本科研でも、同様に探索活動を進めたが、発見に結びつかなかった。

しかしながら、本科研の最大の成果として指摘できることは、当時の新聞に掲載されていた「国語（日本語）」講座が多数存在することが明らかにできたことである。

これは、マスメディアを利用した教育として注目すべきものであり、ラジオ講座のテキストが新聞に掲載されていた時期があることを考えると、ラジオ単独で取り上げるよりも、学校教育と非学校教育、さらに言えば、非学校教育も政府や朝鮮総督府主導のものと民間主導のものがあることを踏まえ、総合的に検討するべきであることが明らかにできた。

ラジオ講座のテキストの存在、および聴取者の確認、並びに聴取者へのインタビューに関しては、戦後60年を過ぎている時間的な問題から、非常に困難であった。テキストの発掘自体も、韓国の図書館での調査や、アメリカの議会図書館への問い合わせ（実際に出向いての調査は行っていない）、日本国内の調査を進めたが、1冊のみ、長野県駒ケ根市にある駒ケ根市立図書館に残っているのを確認しただけである。

具体的な内容について言及したい。

朝鮮で放送されたラジオ講座のうち、テキストが入手できたのは「初等国語講座」の一冊だけである。このテキストを見る限り、文法積み上げ型の教育が行われていたと考えられる。語彙自体は、時代背景を踏まえ、また、戦争に関する語彙や皇室に関する語彙が非常に多く盛り込まれているが、文型としては「～は～です」といった易から難への配列に忠実に従っていることが特徴である。

これは、学校での教育と微妙な相違点があることを示している。

単に文法シラバスとして片づけることはできず、トピックシラバスとしての視点が常にある教材と言えよう。

他地域の教材と比較するとその違いがよくわかる。

シンガポールで放送された講座に使用された教科書では、易から難へという文法シラバスの視点はほとんど見られず、機能シラバスに特化した配列となっていることが指摘できる。

つまり、地域によって異なる状況があり、それに即した講座が放送されていたことが指摘できるのである。

では、朝鮮における特徴とは何か。

それは、学校教育を終えた人々が復習的に学習できる教材であるのと同時に、学校教育で日本語を学習したことのない人々にとっても、学びやすい内容にすることであったと指摘しているだろう。

だから、文法シラバスという易から難への配列を基本としながらも、時局についての話ができるようなトピックシラバスという視点も重視されたのであろう。

ラジオが高価な機器であったことは、冬の候国や朝鮮での普及率を見たときにわかることである。

学会発表などでも、この普及率の低さは常に問題とされていた。

しかし、研究が進むにつれ、新聞に掲載されている「国語」講座との補完関係があったのではないかと考えるようになった。

1940年代の新聞に掲載されている講座は以下のとおりである。

国語講座
国語欄（時事記事、童話、入試問題紹介）
国語教室
日常会話
まちがいやすい言葉
今日の諺
今日の勉強
今日の放送国語
国語ノチカミチ
一日一語
愛国いろはかるた
ケフノオケイコ
マチガヘヤスイ国語

これらの講座が、時期的に重なったり継承されたりしながら継続している。「今日の放送国語」という記事が、ラジオ講座の「初級国語講座」のテキストである。途中から明示されていないがおそらく「国語会話の時間」に充てられていると推定できる記事に代わっている。

新聞に掲載されたこれらの講座は、実は、あまり系統だっって作られておらず、物によ

ては、途中で打ち切りになっている講座すらあることがわかっている。ラジオ講座よりも打ち切りや変更が頻繁に行われているように見受けられる。

新聞紙面は、基本的に朝鮮語によるものであるが、こういう講座や「国語欄」といったものに日本語の記事が見て取れる。

本科研の調査の最終段階で、新聞に見られる国語講座の開始時期が1910年9月までさかのぼるのではないかという調査結果が出た。

この点については別の研究に譲りたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計3件)

① 上田 崇仁 慶南大学校特別招請講演, 「日本語教育の歴史～日本強占期の状況を多面的に」, 2010年9月6日

慶南大学校 (大韓民国)

② 上田 崇仁 日本語教育世界大会, 「植民地朝鮮の新聞『毎日申報』に連載された「国語」(日本語)講座の分析」 2010年7月31日, 国立政治大学 (台湾)

③ 上田 崇仁 日本語教育史研究会, 「植民地朝鮮の新聞『毎日新報』に掲載された「国語」講座の変遷」, 2010年3月20日
大東文化大学

[図書] (計1件)

① 「라디오 강좌에서 본 식민지 조선의 [국어(일어)]교육의 특징」, (2008), 357ページ, 上田 崇仁, 民俗苑, 『근대 한국의 일상생활과 미디어』

[その他]

ホームページ等

<http://homepage3.nifty.com/TAKA730>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上田 崇仁 (UEDA TAKAHITO)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90326421